

---

# 道化な神父は明日を見る

アサシン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

道化な神父は明日を見る

### 【Nコード】

N4909BA

### 【作者名】

アサシン

### 【あらすじ】

もしもISの主人公織斑一夏が平行世界でアリアたちと出会い、共に戦っていく運命があるとしたら……。そんなお話です。

## 神崎・H・アリア

平行世界って信じるか？

少なくとも俺、織斑一夏はあと思う。

いや、あると信じたい。

もしも、平行世界では俺だけ女子しか使えない筈の兵器が使えたら。

もしも、平行世界の俺には可愛い幼馴染がいたら。

もしも、平行世界の俺に強くてカッコイ姉さんがいたら。

まあ……あくまで“もしも”の話だが……。

なんだって現実はその上手くない。

現実の俺は“代行者”として親父、言峰綺礼の命令をこなすだけ。

そんなつまらない毎日が続くのだと思っていた。

ずっと続いてその果てに死ぬ。そんな人生だと思っていた。

あいつらにさえ会わなければ……。

春の日差しが温かい。

親父の任務により俺、織斑一夏は日本に来ていた。

「えっと……確か武偵高だよな俺が行くところは」

ふと辺りを見回す。

時刻は午前8時、首都の中心とも言えるここは多くのビルが立ち並んでいる。

俺の実家があるトリノと比べると少しばかり、いや、かなりの勝手が違う。

道路では多くの自動車が行き来している。

近代的な街だということはすぐに感じられた。

しばらく歩くと、不意に向こうから自転車を猛スピードで走らせてくる奴が目に入る。

そして、その後ろには車軸を二つに平行に並べただけで器用に走る乗り物が。

あれはどこかで見たことがある。確か……セグウェイとかいう乗り物だ。

このまま放置すると間違いなくあの自転車の男は死ぬだろう。蜂の巣……あるいは衝突事故かで。

（しかたない……助けるか）

ほんの気まぐれだった。

別にあの男が死のうと生きようと俺には関係ない。

あいつが目の前で蜂の巣になろうと、あいつの首がふつとぽうともだ。

そう、気まぐれだ。

俺は全速力で目の前の男の元へ駆けた。

風を切るより速く。

零れ落ちた滴が地に着くよりも速く。

「バツ、バカ！ 来るな！ この自転車には爆弾が

」

自転車に乗る男が何か言っているが関係無い。

俺は高速の歩みを止めずに、腰にぶら下げたナイフを2つ抜く。

そして

「もう少し長生きしたいなら頭を下げる。チャリ男」

ヒュンッ

俺が投げたナイフは問答無用でセグウェイ達を破壊する。

自転車男との距離はおよそ20m弱。我ながら良い出来だ。

あとはあの自転車からあいつを降ろせば良いわけだ。

俺は迷わず全力で駆ける。

「く、来るなって言っただろ！ この自転車には爆薬が仕掛けられてる！

減速すると爆発するんだ！ お、お前も巻き込まれるぞ！」

「そうか、それは大変だ」

俺は己の力を脚のみに集中させ

飛んだ。

そして、俺は男の悲鳴をBGMにしながら男の肩を両手で抱いて再び

「うおおおおっ おおおっ！？」

飛んだ

ドガアアアアアアンッツッ！！

閃光と轟音、続けて爆風。

俺と男が飛んだ後、あの自転車が木っ端微塵に爆発したのだ。

まさか本当に爆弾が積んであるとは

！

熱風に吹っ飛ばされながら、俺たちは 引っかかった桜の木に減速させられ、気づくとグラウンドの片隅にあった体育倉庫の扉に突っ込んでいった。ガラガラと音を上げ、倉庫内の何かが崩れ落ちる。

不甲斐無い事に俺の意識は、一瞬、途切れた。

.....

.....

「いてえ.....な、ちくしょう」

「さっきから、ずっと見てたけどやるじゃない。あんた」

「は？」

埃が立ちこむ倉庫の中、目を開けるとそこには仁王立ちしているピンクの髪型をした一人の少女が

俺は言葉を失った。

別に目の前の少女が可愛いから言葉を失ったのではない。  
いや、それもあるかもしれないが。

ただ、“そちらの意味には大した重要性は含まれてはいない”。

そう、俺が言葉を失ったのは目の前の少女がターゲット“神崎・  
H・アリア”だったから。

「フハハハハハハッ！」

「　　？　い、いきなりどうしたのよ」

何たる強運。何たる運命。何たる道化。そして何たる奇跡だろうか！

今まで神に仕える身でありながら、一度たりとも神を信じた事の  
無い俺だった。

だが、今は信じてやろう。

こんな“強運”は神無くしてはあり得ない！

俺は興奮を胸に、言葉を発した。

そして、続けざまにナイフを3本　　首、胸、頭に向けて投  
げた。

「死ねっ！」

「！？」

キンツキンキンツ

アリアは一瞬驚いた顔をみせたが、流石はSランク武偵。糸も容易にナイフを弾き返した。二本の日本刀を使って。

「ほう……流石はSランクといったところか」

「そういうあんた……何者？」

お互いに息を殺して対峙する。  
さて、どうしてくれようか？

ズガガガガガンツ！

突然の轟音が体育館を襲った。

何だ！？

まるで銃撃されているかのような激しい衝撃に襲われる。

「うっ！まだいたのねっ！」

アリアはその紅い瞳で外を睨むと、ぱっ、とスカートの中から拳銃を出した。

「……『いた』って、何がだ？」

「あのヘンな二輪！『武偵殺し』のオモチャよ！」

『武偵殺し』？ヘンな二輪？

ああ、セグウェイね。



「おい、ひとまず一時休戦だ」

「……わかったわ」

アリアがセグウェイ達とドンパチやってるのを尻目に、俺は気絶しているチャリ男を奥へ運んだ。

「あんたも　　ほら！　戦いなさいよ！」

「　　分かった」

セグウェイ達の銃撃が交錯する中、俺はドアの方へと歩いていった。

「あ、危ない！　撃たれるわ！」

「大丈夫だ。問題ない」

俺はそう言って片手をヒラヒラと振った。後ろのアリアに向けて。

「……死ぬんじゃないわよ」

「ああ」

腰から3本ナイフを抜き取り、ドアの外へ身を晒した。  
グラウンドに並んだ7台のセグウェイが一斉に銃弾を放つ。

その弾は

全て当たらない。  
当たるわけがない。  
見えるからだ。

銃弾などは畏れるに足らない。  
いい狙いだ。全て俺の頭部に標準を合わせてやがる。  
だが、甘い。

俺はナイフで一つ一つ、弾丸を真つ二つに切り裂いた。  
切った衝撃で酷く手が痛むが

関係ない。

俺はすぐさま前方に向け走り出す。  
二度目の弾丸が飛んでくるがそれがどうした？

避ける。

避けきれぬ弾なら切る。  
ただ、それだけだ。

セグウェイまでは、あと2m弱。

俺はナイフを放ち、すぐさま一機目を粉碎する。  
それと同時に強く踏み込む。  
目標まで0m。即ち、目標に到着だ。

あとは、殴る。蹴る。  
その繰り返し。  
難しい事はない。

セグウェイたちは全て、跡形も残さぬほどの残骸となった。  
他愛ない……。

ただの残骸となったセグウェイたちが全て沈黙しているのを確かめると、俺は体育倉庫に戻った。

戻って最初に目に入っただのは呆然とするアリアの顔。  
このまま、殺してしまおうかとも思ったがやめた。興ざめだ。

「お、恩になんか着ないわよ。あんなオモチャぐらい、あたし1人でも何とかできた。

これは本当よ。本当の本当」

「あつそ……じゃ、俺がつこ行くから」

そう言っただけでその場から立ち去る。

「ま、待ちなさい！ あんた名前は？」

俺は歩みを止めることなく、うしろの少女にこう言った。

「聖堂教会、第八秘蹟会所属      織斑一夏。以後お見知りおきを」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4909ba/>

---

道化な神父は明日を見る

2012年1月13日18時01分発行